

この「スマートコミュニティ」とは、顔の見えるコミュニティが緩やかに連携する、自立可能な社会的インフラが整備された都市、能力と経験ある行政と住民あるいはサービス「需要者」とのパートナーシップや合意形成が行われる都市と表現されている（30頁、「スマート」「コミュニティ」それぞれについて252～253頁など）。いわば、著者の、現代社会における地域の理想型が「スマートコミュニティ」と名づけられているといえる。そして、その実現のためには、リーダーとなる「出る杭」「出過ぎた杭」の重要性が繰り返し指摘される。まちづくりにおける人材、リーダーの問題はむしろ常にいわれる課題だが、それだけに、それぞれの地域に個別の、単純な処方箋のない課題であろう。

「スマートコミュニティ」に明確な具体例はないが、文中からは、時代の変革を担う「スマートコミュニティ」となりうる都市には一定の人口規模が前提とされているように

みえる（22頁、162頁、230～233頁など）。もちろん、著者もいうように、人口量はさまざまな意味で都市の活性を左右する要素である。だが、「スマートコミュニティ」を現代社会における地域の理想型とすれば、人口規模は必ずしも前提条件とはならないのではないか。事例では湯布院町（約1万2千人、210～212頁）もあげられ、著者の力点も人材に置かれているようにも思われる。

いずれにしても、本書は、「スマートコミュニティのすすめ」でありながら、現代社会における「地域」の理想型とは何かという問い自体が読者にたいし提起されている。著者にとっても本書はその「模索の旅」の起点とされる（252頁）。多様な事例から「スマートコミュニティ」とは何かを問いかける本書は、著者のようにまちづくりに情熱を燃やす多くの人々の刺激となり励みとなるだろう。今後、著者の「模索」からどのような理論が生まれるのか、期待されるところである。

---

田中一昭・岡田彰編著  
『中央省庁改革』

日本評論社、2000年

橋本信之

2001年1月、日本の中央省庁は、1府22省庁から1府12省庁へと改革された。中央省庁再編である。永く省レベルで変化のなかったのが国の中央省庁について、大規模な改革が行われたこと自体印象的である。この改革は、橋本龍太郎内閣の下で1996年から98年にかけて設置された、行政改革会議での検討に基づくものである。このいわゆる「橋本行革」に

ついて、その背景、経緯、改革の内容を整理するとともに、それを改革の視点から批判的に検討し、将来の課題と提言を示しているのが本書である。

橋本行革は、政策の失敗などによる行政への信頼低下、高級官僚のスキャンダル、諸外国におけるNPM（New Public Management、新公共管理）による改革などを背景に、96年

の総選挙で行政改革が論点となったのを直接のきっかけとして、行政改革会議の設置によって始まった。行政改革に経験のある橋本首相のリーダーシップを受けつつ、97年12月の行政改革会議最終報告、翌98年の通常国会における中央省庁改革等基本法の制定、99年夏の中央省庁等改革関連17法の成立を経て、2001年1月の省庁再編の実施へと至ったのである。

本書は、この改革の経緯をたどったあと(第I章、第II章)、本書の中心部分である第III章、第IV章で改革内容の批判的検討を行っている。とくに、橋本行革の主要な部分である、内閣機能の強化、中央省庁の大括り再編、独立行政法人制度の創設に重点を置いて検討している。それらの検討から浮かび上がってくるのは、1つは改革への抵抗であり、いま1つは制度設計の困難さである。

行政改革は、関係する省庁および関連業界、それらとつながる政治家集団による抵抗の強さが従来から強調されてきている。今回はそれにもかかわらず、大規模で広範にわたる改革が実施に移されたのが注目される重要な点であるが、抵抗がなかったのではない。行革会議の中間報告(97年9月)から最終報告にいたる間に、いわば分割が提案された建設省と郵政省がそれぞれ一体として動かされることになったのは顕著な例であるが、本書第III章4で取り上げられている経済財政諮問会議をめぐる経緯も抵抗の強さとともに粘っこさを感じさせるものである。

制度設計の困難さも随処に感じられる。一つだけあげておくと、内閣及び内閣総理大臣の補佐・支援体制の強化の視点から、内閣官房の強化、内閣府の設置などがなされたのであるが、本書は、これについて、内閣制度とりわけ補助部局全般の論議が不可欠であるのに、内閣法制局、安全保障会議、人事院をふくめた議論がほとんどなされなかったことを「奇妙」なことと指摘している(119頁)。内閣という行政機構の頂点をめぐる制度設計について、その困難さにもかかわらず何らかの結論を出す必要があるところから、「奇妙」な議論の欠落も生じたのではないだろうか。

本書は、「橋本行革」という膨大な対象について、その経緯、改革の内容、その批判と提言をコンパクトにまとめ上げるとともに、関係者のインタビューを挿入し、豊かな情報を提供している。橋本首相によって「始めの終わり」(17頁)と言われたのを引いて、これは改革の第1歩であるとしている(27頁)が、いずれにせよ、今後の行政を見る上で、今回の改革を理解しておくことは欠かせないところであろう。その意味で、本書は適切な道案内になるが、手引きとして、さらに理解を深めるための文献、資料のリストが本書に見られないのが惜しまれる。また、紙幅の都合から関係者のインタビューが大幅にカットされている(258頁)のも残念である。これらについて、別の機会に補足されることを期待したいものである。